

新時代のタイ人日本語学習者を対象とした MOOCs 形式の日本語音声教育

アサダーユット チューシー

要 旨

2016年からedXのMOOCs (Massive Open Online Courses) で日本語発音のコースが公開され、新しいプラットフォームでタイ人日本語学習者を対象とした日本語教育コンテンツも世界初公開することになった。それを契機に、本稿は、タイにおける新時代の学習方法としての ThaiMOOC のオンラインコースの使用状態及び、今後のタイにおける日本語教育への活用の可能性を調べた。同時に、edX の Japanese Pronunciation for Communication の「世界の日本語音声教育：タイ語編」の日本語発音の問題点を挙げ、指導法を確認した。2017年に公開されたばかりの ThaiMOOC においては、日本語教育のコンテンツがないため、日本語発音などの日本語教育コースの開講が求められていることが分かった。また、edX のコンテンツでは、日本語アクセントの学習のためにタイ語の声調体系の知識を活用している。タイ語の声調体系を活用する方法をアクセント辞典作成等の教材開発にも使用すれば、日本語の音声教育に役に立つであろう。

キーワード

タイ人日本語学習者 MOOCs 母語知識の活用 アクセント 日本語発音

1. はじめに

『海外日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査』の結果によれば、タイ国内の日本語学習者数は世界第6位であるということであるが、日本国内における日本語学習者全体に対するタイ人学習者はまだ少数派と言える。そのため、日本から発信される日本語教育がタイ人学習者を対象としないのは当然であろう。タイ語版、またはタイ人対象の日本語教育のコンテンツは少ないのが現状である。

一方で、タイ国内では、日本語教育が進み、日系企業の進出を背景に、就職を目的として上級日本語まで学習するタイ人学習者が増えている。2013年から開始された観光ビザ緩

和により、日本旅行も人気となり、旅行の楽しみ方を増やす目的で、サバイバル日本語の学習者も増えている。

学習者の多様化に伴い、タイでの日本語の学習方法はクラス内の活動、または日本語の初級教科書での独自学習以外に、フレーズブック、指差し単語集、Youtube上のいわゆるネット教師による非正規の授業、Facebook Liveによる無料コース等の新しい形式の学習リソースが見られる。いずれも、教師をしているのは日本語専攻の卒業生や元留学生であり、正規の教室授業では導入されない日本語のスラングの話題提供、または、設定を友達との会話場面にし、ユニークな雰囲気での日本語指導が行われている。

そこで、本稿では、現在話題となっているオンラインコースの一種である MOOCs (Massive Open Online Courses) の形式に着目し、タイの MOOCs 形式のオンラインコースの現状を調べたい。また、edX における世界初の日本語教育コンテンツである Japanese Pronunciation for Communication (JPC)、特にタイ人日本語学習者を対象とした「世界の日本語音声教育 (第 5 回)」はどのようなコンテンツなのか、タイにおける日本語の発音練習にどのようなメリットを及ぼすのか、今後この新しい教育コンテンツをどのように利用すべきかについて探る。

2. タイにおけるオンライン教育

MOOCs の流行が始まった 2012 年以前は、タイの高等教育機関では学習支援のために E-learning や Blackboard、Moodle などの LMS (学習管理システム: Learning Management System) を使用してきた。海外のもの以外にも、MyCourseVille、LearnSquare 等の、タイの教育機関が自作した LMS がある。

2012 年、アメリカの Coursera や edX の MOOCs が公開され、ASEAN 諸国でも MalaysiaMOOC が公開されてきた。タイでは、2013 年に、スコタイタマティラート大学 (Sukhothai Thammathirat Open University: STOU) という放送大学が MOOCs のプラットフォームに興味を持ち、MOOCs を目指し、OER (Open Education Resources) を開発した。OER のネットの中には、様々なレベルの E-Book 及び学習教材モジュール (Learning Object Module) がある。それに、「STOU Online Courseware」というオンラインコースも公開した (Jaroenpuntaruk, 2015:13)。一方、同様のオープン大学であるラムカムヘン大学 (Ramkhamhaeng University) の場合は、在学生向けのコンテンツが「M-Learning」としてホームページで公開されている。

2017 年 3 月に、タイ政府が後援する Thailand Cyber University Project により作られた「ThaiMOOC」が公開された。本プラットフォームの開発は日本の JMOOC と韓国の KMOOC の開発者から協力を得たという。ThaiMOOC は、非営利で、受講者を 3 種に分けている。大学在籍者の場合は自分の大学の授業に単位編入するために利用できる。一般人は資格取得のために MOOCs を利用して学習する。この 2 種の受講者に対して、各コースの担当者は試験を施行しなければならない。この段階においては受験料が有料になる。最後の種類は、教師を含む一般人が興味のある分野の基礎知識を自由に学習することである。

本書所収の木下（2017）は、アメリカにおける主要オンライン教育のコース数や協定機関数等を調べている。一方、筆者は、タイの唯一の MOOCs 形式の ThaiMOOC について調べ、次の表 1 にまとめた。

表 1 ThaiMOOC におけるコース及び協定機関数

名称	全コース数	言語系コース数	日本語教育 関連コース数	協定機関数
ThaiMOOC	145	13	0	40

（資料の出典：www.thaimooc.net、閲覧日 2017/5/20）

木下（2017）の情報と比較すると、ThaiMOOC の登録済みのコースは非常に少ないことが分かる。さらに、言語系コースは全 13 コースであり、全体の約 9% となる。殆どは英語のコースで、タイ語のコースとマレー語のコースが各 2 コースある。他の外国語学習は ThaiMOOC にはない。

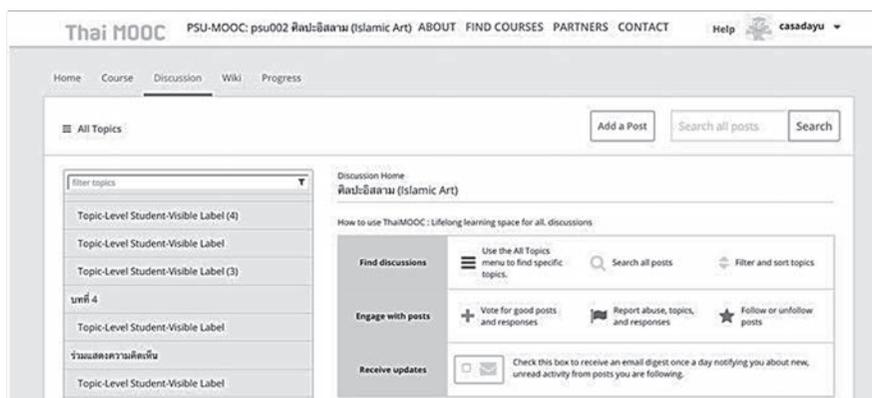


図 1 ThaiMOOC のディスカッションボード

ThaiMOOC のコンテンツを確認すると、従来のオープン大学の Course on Demand と同じような動画ファイルやコースシラバスがあるが、動画ファイルはサブトピックに分かれ、受講者が 1 時間以上講師の講義を受け身で聞き続けるものではなく、画面に出ているテキストとともに、10～20 分単位の動画ファイルを少しずつ学習することができるものになっている。また、動画では、実際の講義を録画したものを動画ファイルにした Course on Demand に対して、MOOCs のコースではグラフィックまたはパワーポイントファイルが多いという点異なる。図 1 に示したように、Course on Demand がないディスカッションボード機能もある。その他、関連記事を引用する「Wiki」機能や、学習者の聴講の記録を示す「Progress」機能もあるが、現時点ではまだまだあまり活用されていない。さらに、各コースには、コースの学習前と学習後のテストがある。学習前のテストはどのような内容が展開されるかを予告する機能も兼ねている。

現在、ThaiMOOC には日本語教育のコンテンツがないため、一般ユーザーを想定した、

日本語発音を含む、初級日本語学習者やサバイバル日本語の学習者向けのコンテンツから開講するように提案したい。

3. 「世界の日本語音声教育：タイ語編」

edXのMOOCsにはJPC（コミュニケーションのための日本語発音）がある。これは多様な学習者向けの日本語教育コンテンツである。コース内の「世界の日本語音声教育」でタイ人日本語学習者を対象とした内容が紹介されている。MOOCs上のタイ人日本語学習者を対象とした日本語教育の最初のコンテンツだと言える。2017年9月7日現在、タイからの登録者数は計495名である。

日本語の発音指導において、母語の影響を受けた発音の特徴が学習者によって異なるため、指導すべき点が異なっている。上述した通り、タイ人学習者は日本国内の日本語教育現場においては数少ないため、クラス内で個別の発音指導が難しい。しかし、MOOCsのコースでは、学習者が自分のペースでいつでもどこでも学習することが可能である。また、母語話者の日本語発音のみならず、各国の学習者の日本語発音の特徴を理解することもできる。日本語話者が日本人だけではない現代では、大変役に立つ情報なのではないかと思われる。



図2 「世界の日本語音声教育」タイ語編

日本語発音の問題は、拍レベル、単語レベル、文レベルに分けられる（Chusri, 2006）が、このコースでは、頻繁に挙げられている拍レベルと単語レベルの発音の問題に着目している。

3.1 拍レベルの発音指導

3.1.1 「シ」と「チ」

タイ語には、「CH」の音はあるが、それを含む語によって「シ」とも「チ」とも聞き取れる。本講座では、長く発音できるのは「シ」、強く息を出して止めるのは「チ」という区別の練習が紹介されている。

3.1.2 「ツ」

「ツ」音、つまり「TS」の音は、多くの言語に存在しない。タイ語にもないものなので、

タイ人学習者にとって発音しにくいものとなる。本講座では、調音時の留意点が紹介されている。それは、舌先は歯茎に接しない「S」に対して、「TS」は舌先を一回歯茎につけてから離して発音するものだという説明である。

拍レベルでは、「シ」と「チ」の区別の問題と「ツ」の問題の他に、「ガ」行音、「ザ」行音、拗音（特に [-jo]）の問題もある¹が、本講座では時間の関係上割愛した。

3.2 単語レベルの発音指導

単語レベルでは、日本語のアクセントの問題がある。日本語のアクセントは高低アクセントのため、タイ語の声調に慣れたタイ人学習者にとっては習得しやすいと考えられる。しかし、Chusri (2006) でも述べた通り、「平板型」、「頭高型」、「中高型」、「尾高型」の4種の中で、タイ語の発音にない「平板型」が最も学習しにくいものである。

本講座では、タイ語の5声調の知識を日本語の発音指導に活用することを提案している。タイ語の5声調は、声の高低の変化があるものとならないものに大別できる。変化がないものとは、発音の開始時と終了時のピッチの高さが変わらないものである。これは、「低音」（第2声調）、「普通音」（第1声調）、「高音」（第4声調）に下位分類される。一方、変化があるものには、ピッチが高くなってから落ちる「下音」（第3声調）と、ピッチが低くなってから急に高くなる「上音」（第5声調）がある。タイ語の声調を順番に Tone Letter²で示すと、以下の図3に示すように、「33」「22」「43」「44」と「25」の順となる。

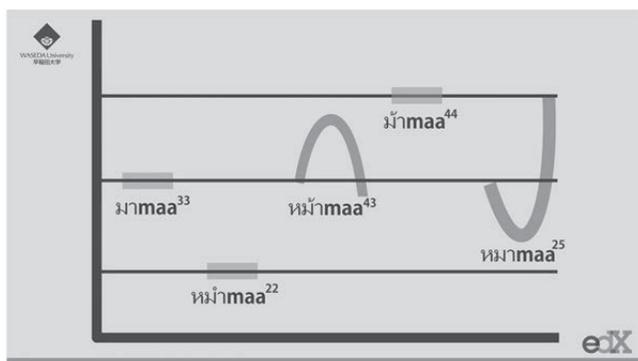


図3 タイ語の5声調

3.2.1 「頭高型」と「中高型」

「頭高型」と「中高型」の場合、滝（ピッチが落ちる）の前の拍は、タイ語の高音のように発音し、次の拍で、「普通音」か「低音」と発音すれば、日本語の「頭高型」と「中高型」と同様のピッチになる。例えば、本講座で紹介した「作業（さぎょう）」は、タイ語の「sa⁴⁴gyoo³³」で発音できる。このように、「頭高型」の「テレビ」は、タイ語の表記で「**ทะเละบิ**」[the⁴⁴-le²²-bi²²]、「中高型」の「果物」は、「**ทุตะโมโหนะ**」[khu²²-da⁴⁴-moo³³-no²²]で日本語発音を導けば、アクセントがより自然になるのではないと思われる。

また、「〇ん」、「〇い」は、日本語では2拍と数えられているが、タイ語の場合、1音節となる。日本語の2拍語に滝があると、タイ語の「下音」で発音される1音節と同じ発音

になる。例えば、「どんな」は、頭高型であるが、「どん」はタイ語の「**ดั้น**」[don⁴³]と同じように発音した方が分かりやすい。ただし、より自然な発音にするためには、拍をもう少し伸ばすように指導を加えるべきである。このようなルールは「中高型」にも応用できる。例えば、「こくさいじん」は、「**โคะคุไซจิน**」[kho²²-khuu³³-saj⁴³-cin³³]と記した方が発音しやすい。



図4 「頭高型」アクセントとタイ語の声調

3.2.2 「平板型」と「尾高型」

「平板型」と「尾高型」は、助詞がない場合、区別は難しいが、「尾高型」は全体数が少ないため、暗記しておくといいであろう。「平板型」と「尾高型」の1拍目と2拍目の高低の違いについて、タイ語の声調で1拍目は「普通音」または「低音」と2拍目は「高音」を組み合わせる方法で、アクセントを発音することができる。図5の「平板型」の「はこ」と同様に、「尾高型」の「むすめ」は「**มูซุมะ**」[mu²²-su⁴⁴-me⁴⁴]で導けば発音しやすくなるだろう。



図5 「平板型」アクセントとタイ語の声調

「世界の日本語音声教育」ではここまで紹介されているが、タイ語の声調体系には「上音」もあるため、「低高」のピッチに応用できるだろうと考えられる。例えば、「おい」、「おん」の「**ได๋งัก**」³ [dai²⁵-ŋaa³³-khuu³³]「**ขนนา**」[khon²⁵-naa³³]となり、日本人に確認してもらった結果、確かに「平板型」であるが、正確さが求められるニュースやアナウンスのような発音に聞こえ、日常会話で発音すると違和感がある。つ

まり、日常会話で発音するものはタイ語の表記で書けない〔dai²³-naa³³-khoo³³〕、〔khon²³-naa³³〕のようなものである。

1 拍目と 2 拍目の違いの他に、タイ語の語末が短母音の場合、「低音」か「下音」か「高音」の 3 パターンにしか発音できないというルールがあるため、「平板型」のように「普通音」で発音すると不自然に感じるという母語干渉の現象が現れる。「平板型」はこの 2 つの問題により、最も発音しにくいものとなるのである。

4. タイにおける日本語の音声教育の過去・現在・未来

過去のタイにおける日本語の音声教育といえば、鈴木ほか編（1978）の『日本語はつおん』のタイ語版が出版されていたが、拍レベルの音素の発音練習が主であり、アクセント練習はなかった。また、教科書にもアクセント情報がなかったため、アクセントを意識しない学習者が多かった。そのため、日本語のカタカナ語のアクセントと英語のアクセントの違いも区別せず、英語のままのアクセントで発音する人が多かった。当時のタイの日本語教育は、音声の教材が少なかったことや、文法、書き言葉を中心に学習する方針であったことから考えれば、なぜ発音練習が重視されなかったのか分かる。

現在は、コミュニケーション能力が重視されるため、もはや発音練習を軽視できる時代ではない。発言やパフォーマンスの中での正確な発音は自信をつけることに繋がるため、学習者からの要求も高くなる。また、学習者の発音の問題は多様であるため、ひとつの教授法ではなく、学習の習慣に合わせた方法を多く用意すべきである。したがって、クラス内でひとつの方法で教えるよりも、自由に自分に合う方法を選んで独自に学習してもらう方が良いのではないかと思われる。

前節で挙げた JPC の「世界の日本語音声教育」タイ語編では、母語知識を単語レベルのアクセントの学習に活用している。タイ語の声調体系の活用はこの発音指導の方法のひとつである。この方法に対するビリーフがない学習者にとっては、母語干渉を恐れることから抵抗感もある。タンヌアンジャン（2015）では、この方法に対するビリーフがある学習者は、とても役に立つ、覚えやすいと評価し、ビリーフがない学習者は、スペクトログラムのピッチ曲線の確認や図で示す方法や、シャドーイングを求めていることが分かっている。

現在、『Nihongo Akiko to Tomodachi Wordbook』（Saengthongsuk, et. al. 2007）等のタイの初級日本語教科書の単語集では単語に高低の線をつけたアクセント情報が載っている。アクセント辞典だけでなく、中級の単語集、または日タイ辞典にも載せるようにすべきである。シャドーイングにおいては、練習の音声教材が少ないため、音声教材の他に、動画教材等の開発も求められる。最後に、今回の MOOC で行われた母語知識の活用においては、声調体系以外にもタイ語が活用できる他のコンテンツもさらに取り上げるべきである。例えば、タイ語にある日本語からの借用語における発音の違い等である⁴。また、動画ファイルの他に、タイ語表記及び音声ファイルが収録された日本語アクセント辞典（書籍、アプリ等）が作成されれば、学習者が様々なツールでいつでも発音練習できるようになる。

ちゅうごく	
ちゅうごく (中国)	ประเทศจีน
ちゅうしゃじょう (駐車場)	ที่จอดรถ
ちゅうしゃする (注射する)	การฉีดยา
ちゅうもんする (注文する)	สั่ง(ของ)
ちょうど (丁度)	พอดี
ちょうれい (朝礼)	การเข้าแถวหน้าเสาธง
チョコレート	ช็อกโกแลต
ちよっと...	ส่วนที่ใช้ในการปฏิเสธ
ちよっと	น้อย นิดหน่อย
ちよっとみせてください。 (ちよっと見せて下さい。)	ขอดูหน่อย
ちり (地理)	ภูมิศาสตร์

図6 『Nihongo Akiko to Tomodachi Wordbook』
(2007) のアクセント表示例

英語教育と比較すると、学生用の英タイ辞典には、タイ語の表記で強弱アクセントを提示する情報があるのに対して、日タイ辞典にはまだアクセントの情報がないことから、どのようなプラットフォームにせよ、タイ語の表記で示すアクセント情報を提示する辞典を含めて、アクセントが確認できるツールの開発が急務であると考えられる。

5. おわりに

以上、タイのMOOCs形式における日本語教育コースの現状⁵及び、edXのJPC「世界の日本語音声教育」タイ語編のコンテンツを踏まえた、タイにおける日本語の発音練習を検討した。2017年に公開されたばかりのThaiMOOCにおいては、日本語教育のコンテンツがないため、日本語発音などの日本語教育コースの開講が求められている。また、edXのコンテンツでは、日本語アクセントの学習のためにタイ語の声調体系の知識を活用する方法が見られたが、タイ人学習者の学習スタイルに合わせるように、このような方法を用いたアクセント辞典等の教材も作成する必要がある。それに合わせて、新時代のプラットフォームで、タイ人学習者のためのアクセント練習、クイズのような工夫をすれば、世界中の日本語学習者に利用が広がり、今後の日本語の音声教育に役に立つのではないかとと思われる。

謝辞

早稲田大学大学院日本語教育研究科教授戸田貴子先生のお誘いを受け、JPCプロジェクトの一部に参加することができ、この場で心より感謝を申し上げます。また、本稿はチェラーロンコーン大学文学部の2016年度Wichayopakan Research Grantの助成を受けたものです。

注

- 1 「ガ」行音と「ザ」行音の問題は、無声音・有声音の対立がないタイ語、中国語の話者の共通の問題点だと考えられる。一方、[-jo] の拗音は、タイ語にないが、それに似た「イアウ」の複合母音として発音される可能性が高い。そのため、「りょこう」を「リアウコウ」と発音する例のように、[-jo] の誤りだけでなく、母音の問題も重なる。
- 2 タイ語の Tone Letter は Chao (1930) の中国語の声調記号として表示するものを基にして工夫されたものである。数字 1~5 があり、3 が基準となり、1、2 は低いピッチ、4、5 は高いピッチである。
- 3 タイ語には [g] の表記がないため、「ガ」行音を無気音の「ŋ」[k] か鼻音の「ŋ」[ŋ] で綴る必要がある。
- 4 タンヌアンジャン (2015) では、長時間の練習後、タイ人学習者は何らかの方法でアクセントを修正するが、タイ語に定着した日本語からの借用語の発音だけはなかなか日本語発音のように発音できず、化石化とも考えられるという報告がある。
- 5 最新の情報として、2017 年 8 月に Chula MOOC (<https://mooc.chula.ac.th/>) が開設された。

参考文献

- 木下直子 (2017) 「日本と米国におけるオンライン教育と現状—身近な学習者にアドバイスするために—」『早稲田日本語教育学』23、pp. 21-30
- 鈴木忍、川瀬生郎、国際交流基金日本語国際センター (1978) 『日本語はつおん』凡人社
- タンヌアンジャン・カモンボン (2015) 『タイ人学習者の日本語アクセントの認識における母語の音節体系の影響による問題とその解決方法—タイ人初級学習者を対象にした事例研究—』チュラーロンコーン大学外国語としての日本語修士課程修了論文
- 戸田貴子 (2016) 「MOOCs (Massive Open Online Courses) による日本語発音講座—発音の意識化を促す工夫と試み—」『早稲田日本語教育学』21、pp. 87-91
- Chusri, Asadayuth (2006) 「日本語とタイ語の発音に関する対照研究」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』3号、pp. 75-86
- Chao, Yuen-Ren (1930) A System of Tone-letters, *Le Maitre Phonétique* 45, pp. 24-27
- Jaroenpuntaruk, Vipa (2015) MOOC : Free Open Education in Digital Era. *วารสารศึกษาศาสตร์ มสส* ปีที่ 8 ฉบับที่ 2, 2558, pp.1-15
- Saengthongsuk, Prapa; Kumano, Nanae; Matsubara, Jun (2007) *Nihongo Akiko to Tomodachi Wordbook*, Japan Foundation
- LearnSquare 紹介サイト <<http://www.thailibrary.in.th/2014/07/14/learnsquare-lms/>> (2017 年 5 月 30 日)
- MyCourseVille 公式サイト <<http://www.mycourseville.com>> (2017 年 5 月 30 日)
- ThaiMOOC 公式サイト <<http://www.thaimooc.net>> (2017 年 5 月 30 日)
- ThaiMOOC の説明会ニュース <<http://www.trueplookpanya.com/knowledge/content/56330/>> (2017 年 3 月 6 日)
- ラムカムヘン大学の M-Learning <<http://www.m-learning.ru.ac.th>> (2017 年 5 月 30 日)

(あさだ一ゆつと ちゅーしー チュラーロンコーン大学文学部)